

せんせい、またしようなあ～  
～安心できる保育者とふれあいあそびを楽しむ～

<これまでの経過>

進級児14名 新入児2名 計16名のクラス。自分の思いをいろいろな方法ではっきりと表現する子どもが多い。興味や集中する時間に個人差はあるが、いろいろな活動に興味をもち、クラス全体と一緒に楽しむ姿も多く見られる。友達に興味があり関わりを喜ぶ姿があるが、思いが伝わらずトラブルになり緊張した表情を見せ、集団で活動する際は、じっとしている姿も見られる。

まずは、一人ひとりが安心して遊べるように、子どもの姿に応じて言葉をかけながら、保育者との信頼関係を築いていけるようにした。また、子どもたちが興味をもち楽しめるような遊びを積極的に取り入れていき、保育者と一緒に遊びながら友達と関わる楽しさを感じられるような機会をつくるようにしてきた。

<本活動のねらい>

- ・保育者のそばで安心して過ごし、好きな遊びを楽しむ。

<本活動での教育的意図>

- ・好きな遊びの中で、友達への関心をもてるようにする。
- ・安心できる保育者といること、興味をもって遊べるようにする。

子どもと保育者の姿 保-保育者 子-子ども  
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

視点 子どもに育てたいこと  
教育的意図をもった働きかけ

○みんなで集まり座って絵本を見た後

保 「みんなでポットンしようか？」

子 「うん！するする！」

保 ♪手をつなごう みんなで手をつなごう～と口ずさむと、歌に合わせて手をつなぎ始める子どもや、その様子をじっと見ている子どももいる。

保 「じゃあ～始めるよ」

保・子 ♪なべのなかのくりが～

保 新入のA児が笑顔で遊んでいる様子を見守りながら遊ぶ。

保 「楽しかったね」

子 「うん。もう1回しよう」 自立心、社会生活との関わり等

保 「そうだね。もう1回しようか。Aちゃん、一緒にしよう」

A児 黙って立っている

知好きな遊びを取り入れることで、活動への意欲や期待感をもてるようにする。

徳保育者が口ずさむことで、子どもたちも一緒に動き出したり自分もやってみようとしたりする楽しい気持ちを引き出す。

徳遊びに直接参加しなくても、自分から参加する気持ちになるように遊びを見ている子ども一人ひとりの表情や動きを見守る。

<p>保 「一緒にしよう」と言いながらA児のそばに行き、笑顔で手を差し出す。</p> <p>A 児 表情は硬いが保育者と手をつないで、輪の中に入る。</p> <p>保 「それじゃ始めるよ」</p> <p>保・子 ♪なべのなかのくりが〜 一緒に歌ったり、笑顔で体を揺らしたり、「ポットン」の声かけに合わせて、笑顔でジャンプして座ったりしていく。 <b>自立心、協同性、社会生活との関わり等</b></p> <p>保・子 「♪Aちゃんもポットン」</p> <p>A 児 笑顔で座る。</p> <p>保 「楽しかったね。またみんなでしようね」</p> <p>子 「楽しかった」</p> <p>子 「先生、またしようなあ〜」 <b>協同性、豊かな感性と表現等</b></p> <p>保 A児の顔を見て、微笑みかける。</p>	<p>徳 子どもの思いを受け止め、無理なく遊びに参加できるようにすることで、<u>保育者との信頼関係を積み上げる。</u></p> <p>徳 保育者や友達に誘いかけられたことを受け入れ、活動に参加することで、<u>友達との関わりが深まっていく</u>よう子どもの姿を見守る。</p> <p>徳 友達の姿に目を向け親しみを感じ、<u>友達と関わるのが楽しいと思えるように、子どもと視線を合わせ声をかける。</u></p>
--	---

**【考察】**

- ・ 友達の様子を見たり遊びを真似たりして、友達に興味を示す子どもが多いので、友達と触れ合う遊びを意識して取り入れ繰り返し遊ぶことで、友達と遊びたいという気持ちが高まってきた。

(社会生活との関わり、豊かな感性と表現等)

- ・ 新入児と進級児では生活全般において経験の差がある。「おもしろそうだな」「遊びたいな」と思える状況をつくることや、無理に遊びに誘うのではなく、「見て楽しむ」ことから認めていくことが大切だと思う。

(自立心、協同性、社会生活との関わり等)

**今後に向けて**

- ・ わらべうたなどのように、年齢に合わせて遊べる歌を保育者が取り入れながら、友達と関わるのが楽しいと感じる気持ちを育てていきたい。



おもしろかったなあ

～保育者や友達と一緒に体を動かして遊ぶ～

<これまでの経過>

進級児10名 他園からの新入児2名 計12名のクラス。進級児はこれまでの経験もあり、探索活動が盛んで、自分で好きな遊びを見つけて楽しむ姿が見られる。新入児は環境が変わったこともあり不安な様子もみられるが、保育者がそばにいと安心して生活するようになってきた。また、保育者と数人の子どもで追いかけっこを楽しんだり、動物になって体を動かしたり、保育者と一緒にみんなで体操をしたりすることを楽しむ姿も見られるようになっている。

<本活動のねらい>

・保育者や友達と一緒に体を動かして遊ぶことを楽しむ。

<本活動での教育的意図>

・興味のある活動を通して、「楽しい」「一緒にやってみたい」という気持ちを育む。

子どもと保育者の姿 **保**-保育者 **子**-子ども  
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

**視点** 子どもに育てたいこと  
 教育的意図をもった働きかけ

○ほとんどの子どもが朝のおやつを食べ終わった頃  
**保 1** 「お外に行く前に体操しようか」  
**子** 「する、するー」と言いながら保育者に近づいてくる。  
**A 児** 「やったー」と言いながら両足ジャンプをする。  
**B 児** 「ウサギさんのかわいい」 **健康な心と体等**  
**保 1** 「そうか、動物体操したいんだね」  
**D 児** (新入児) 保2に側で見守られながら、おやつを食べている。  
**保 1** 「Dちゃんもおやつが終わったら体操しよう！待ってるね」  
**D 児** 保2の顔を見る。 **社会生活との関わり等**  
**保 2** 「Dちゃんの好きなウサギだって」  
**D 児** にっこり微笑む。  
**保 2** 「食べ終わったら、みんなと体操しようか？」  
**D 児** 「うん」と言いながらうなずき、残りを食べ始める。  
 ○路面電車の遊びの中で  
**保 1** 「Dちゃんが来るまで、路面電車に乗ってお出かけしよう」

**体** 行動を具体的に知らせることで、生活に見通しをもてるようにする。  
**体** 戸外に出る前に体を動かし温めることでけがのリスクを軽減する。  
**知・徳** 子どもなりの表現をくみ取ること、思いが伝わった満足感を味わうことができるようにする。  
**徳** 個々のペースを認めながらも友達がしていることに気付かせることでクラスの一員であることを感じるようにする。  
**徳・体** 子どもの興味のあることから、やりたい気持ちを引き出すようにする。  
**徳** 保育者と触れ合って遊ぶことの心地よさを感じながら「待つ」ことで、友達に関心をもてるようにする。

<p>子 保育者が伸ばした足の上に座ろうとするが、全員は座れず押し合いになる。</p> <p>保 1 「この路面電車は公園に行きます。でもちょっと満員です。動物園に行く友達は、次の路面電車をお待ちください」</p> <p>B 児 「動物園、行く」</p> <p>保 1 「動物園に行く人は、この椅子でお待ちください」と言いながら長椅子を置く。</p> <p>B 児 「はい」と返事をしながら長椅子に座る。</p> <p>子 保育者の足の上に座ったり、保育者と同じように足を投げ出し座ったり、長椅子に座ったりする。</p> <p style="text-align: right;">[道徳性・規範意識の芽生え等]</p>	<p>徳 子どもたちと身近な乗り物を題材に遊ぶことで、<u>順番があることが分かるようにする。</u></p> <p>知・体 実体験からイメージできるようにすることで、<u>次の行動に見通しをもてるようにする。</u></p>
<p>保 1 「路面電車、出発しまーす ♪路面電車に～ストーントン！ 公園駅です」</p> <p>A 児 「ありがとう」</p> <p>子 「おもしろかったなあ」と言いながら床に寝そべって顔を見合わせている子どももいる。 [協同性等]</p> <p>保 1 「おもしろかったね。また次にしようね。次の路面電車は動物園行きです。お乗りの方はいらっしゃいますか？」</p> <p>B 児 「いまーす」</p> <p>子 長椅子から保育者の足に座りかえる。</p> <p>保 2 「動物園行き路面電車、出発しまーす。 ♪路面電車に～ストーントン！ 動物園駅です」</p> <p>A 児 長椅子に座って一緒に体を揺らしながら歌う。</p> <p>○そこへ保2とD児が急ぎ足で近づいてくる。</p> <p>保 2 「Dちゃんも特急電車で到着！」</p> <p>D 児 笑っている。</p> <p>保 1 「みんな、Dちゃんも来たよ。みんなで動物に変身するよ」</p> <p>○♪動物体操の音楽が聞こえる。</p> <p>保 1 「ピョンピョンってジャンプだよ」</p> <p>A 児 「見て見てー」</p> <p>保 1 「Aちゃんウサギだね。両方の足でジャンプしてる！」</p> <p>D 児 ひざを屈伸させながら笑顔を見せる。</p> <p>保 1 「Dちゃんウサギも楽しそうに跳ねてるね」</p> <p>D 児 さらに激しく体を上下させる。</p> <p>子 自分なりに体を動かすことを喜び、時々、子ども同士で顔を見合わせている。 [協同性等]</p>	<p>徳 子どもの表情や言葉に共感することで、<u>自分の気持ちが伝わった喜びを感じるようにする。</u>また、<u>順番があることを知る</u>ことができるように待つことや、待っていたら自分の順番が来ることを経験する中で、保育者と共感し、できたことを認めていく。</p> <p>知 友達と少しでも遊びのイメージを共有できるようにすることで、<u>遊びたくなるような気持ちを育む。</u></p> <p>徳 子どもが期待しながら遊びに参加できるようにすることで、<u>友達への興味や関心、一緒に遊びたい気持ちを育むようにする。</u></p> <p>体・徳 子どもの姿を捉え言葉に置き換えることで、<u>もっと体を動かしたいという気持ちになるようにする。</u></p>

### 【考察】

- ・ A児、B児は自分から友達と遊ぶことが楽しいと感じている様子が見られる。D児は保育者との関係が安定してくると同時に、少しずつ友達のことや友達がしている遊びに興味や関心をもてるようになってきている。このように一人ひとりの姿をよく観察し、理解しておくことが大切であることに気付いた。個の発達段階を理解をしながら、集団の中で育まれることが多い時期であることも踏まえて、全体の見通しをもった計画性と、その時々の子どもの姿に応じた関わりが求められると分かった。子どもが活動する中で『楽しい』『一緒にやってみたい』という意欲を育む基盤となるのは、まず保育者との安定した関係が必要であることが明らかになった。

(健康な心と体、道徳性・規範意識の芽生え、協同性、社会生活との関わり等)

### 今後に向けて

- ・ 歩く、走る、跳ぶなどの運動機能が発達する時期でもあるので、保育者と一緒に生活の再現や、模倣遊びを取り入れながらごっこ遊びを展開し、子どもがイメージをもって体を動かす遊びを経験できるようにしていきたい。



ペタペタポンポンたのしいなあ

～保育者や友達と一緒に感触遊びを楽しむ～

<これまでの経過>

進級児6名 新入児6名 計12名のクラスで4月からスタートした。当初は保育者との1対1の関わりの時間がもてるように、わらべうた遊びやふれあい遊びを楽しめるようにした。また、いろいろな経験や活動を通して人と関わる力や言葉が育まれるように、様々な素材を使った感触遊びや、つくる活動を意識的に取り入れてきた。その中で、子どもが楽しいと感じたり、気付いたりしたことを言葉や体で表現しようとする姿を捉え、丁寧に関わってきた。その結果、どろんこ遊び・色水遊び・水遊び・ボール遊びなどいろいろな遊びに積極的に参加するようになってきている。

<本活動のねらい>

- ・保育者や友達と一緒に興味のある遊びを楽しむ。
- ・絵の具を使って、スタンプングや感触遊びを十分に楽しむ。

<本活動での教育的意図>

- ・保育者が仲立ちとなり、友達の様子を伝えたり誘ったりすることで、保育者や友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じられるようにする。
- ・言葉や体で思いや気持ちを伝えることが楽しいと感じられるように、保育者が共感したり、応答したりしながら、表現したい気持ちを育む。

子どもと保育者の姿 [保・保育者  
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿]

視点 子どもに育てたいこと  
教育的意図をもった働きかけ

Oいろいろな素材の紙（模造紙・画用紙・障子紙）を準備し、自分の好きな場所で、スポンジやオクラ、手を使って紙にスタンプングし、ぬたくりをする。

A 児 両手に絵の具を付け、紙の上をポンポンとたたき、満足そうな表情で「かけたー」と知らせる。

保 「かけたね」

A 児 「ペタペター」 [言葉による伝え合い、豊かな感性と表現等]

保 「ペタペタしてる？」

A 児 「うん。ほら・・・見て」と両手を見せる。

保 「ほんただ。Aちゃんのペタペタいっぱいできたね」「今度は違う絵の具使ってみる？」

A 児 「うん！」と言いながら、絵の具を選びに行くと、使いたかった水色をB児が先に使っており、どうしたらいいものかと困っている。

保 「Aちゃんは水色を使いたかったのね。どうする？Bちゃんに言ってみる？それともこっちの青色使う？」

A 児 「うーん・・・水色がいい」

保 「そうだね。水色きれいな色だもんね。じゃあBちゃんに言ってみようか」

A 児 「水色貸して」

B 児 「あかん」 [言葉による伝え合い、自立心等]

A 児 「・・・」 困った様子で保育者の顔を見る。



徳 子どもが思ったり、感じたりすることに共感することで、伝える喜びが感じられるようにする。

知 他の色もあることを知らせ、いくつかの中から自分で選択できるように提示することで、自分の気持ちを表現できるようにする。

<p>保 「じゃあBちゃん 終わったら貸してね」</p> <p>B 児 「うん」</p> <p>保 「Aちゃんはちょっと待てるかな？その間にスポンジやオクラを使ってみる？」</p> <p>A 児 「うん」と言ってオクラのスタンプングを始める。</p> <p>B 児 A児の様子を気にしながらしばらく水色を使っていた。</p> <p>B 児 「もういいわ。ぼくもオクラするー」と水色の絵の具を持ってきた。 <b>道徳性・規範意識の芽生え、自立心等</b></p> <p>保 「Bちゃん、ありがとう。Aちゃん、Bちゃんが水色を持ってきてくれたよ。使う？」</p> <p>A 児 「うん」</p> <p>A・B 児 並んでオクラのスタンプングを楽しみ始めた。 <b>協同性等</b></p> <p>C 児 スポンジに絵の具を付けて、模造紙に何度もスポンジでスタンプングするたびにジャンプをしている。</p> <p>保 「いっぱいできたねえ。すごいねえ。楽しいねえ」</p> <p>C 児 「楽しい！もっとしたい」</p> <p>保 「いいよ～いっぱいしていいよ！」</p> <p>C 児 模造紙一面にスタンプングや、ぬたくりを楽しんだ後「海みたい！」 <b>豊かな感性と表現性等</b></p> <p>保 「ほんとだね。海に見えるね」</p> <p>D 児 「海知ってる」</p> <p>C 児 「魚いる」</p> <p>保 「そうだね、魚だね。こんなに大きな海だから魚がいっぱいいるかもね。魚をかいてみる？」</p> <p>C 児 笑顔で、魚を表現する絵の具や用具を探しに行った。 <b>自立心、豊かな感性と表現等</b></p>	<p><b>徳</b>A児の気持ちを受け止め、代弁することで、お互いの思いを叶えるためにどうするか、具体的に知らせていく。</p> <p><b>知</b>遊びの展開に見通しをもち、素材や紙の量を十分に用意することで、やってみようとする意欲につながるようにする</p> <p><b>徳</b>保育者が仲立ちとなり、友達の様子や気持ちを伝えることで、友達のしていることに興味もてるようにする。</p> <p><b>知</b>もっとやりたい気持ちを受け止めスタンプできるところや用具を示す。</p> <p><b>知</b>子どもの発想や驚きを見逃さず受け止め、共感したり代弁したりすることで、表現したいという意欲を育めるようにする。</p>
---	---

**【考察】**

- ・ いろいろな素材を用意し環境を整える事で、子どもたちの意欲が高まり、子ども一人ひとりの遊びを楽しむことができた。また、友達に対して興味をもち始めた時期なので、保育者が仲立ちとなり、互いの気持ちを伝えるなど一緒に遊ぶことが楽しいと感じられるようにすることが大切だと考え、働きかけた。  
**(自立心、思考力の芽生え、協同性等)**
- ・ 「やりたい」と思ったことを保育者に伝えたら、今はできなくても待てばできるという経験が信頼関係につながり、育ちの基盤になると考える。  
**(自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり等)**
- ・ 様々な素材を使って絵の具でのスタンプングを十分に楽しめるようにしたことで、気付きや発見、楽しいと感じる気持ち、もっとやってみたいという意欲が出て、言葉や体・表情を通して、表現する姿が見られた。それに対して、保育者が気持ちに寄り添うことで、一層楽しめていたと思われる。  
**(豊かな感性と表現、言葉による伝え合い等)**

**今後に向けて**

- ・ 友達との関係がますます深まっていく中で、保育者の仲立ちや見守りが必要となっていく。それぞれの言葉の獲得や表現方法などが様々であるため、保育者は子どもの状況を把握しながら、子どもが思いを伝えたり、表現したりすることが楽しいと感じられるように、タイミングよく働きかけることを意識していく必要がある。また、興味のあることをそれぞれのペースで十分に楽しむことが、いろいろなイメージをもったり経験したことにつながったりする。この表現活動が次の遊びの土台になっていくようにしていきたい。

はやくたべたいなあ

～食べることに興味や関心をもつ～

<これまでの経過>

身の回りの様々なことに興味を示す6名のクラス。4月末から、『しーっ！ひみつのさくせん』の絵本（いろいろな作戦を立てて鳥を捕まえようとする内容）を繰り返し読んでいると、絵本の時だけでなく、日々の遊びの中でも、場面に合わせて「作戦」という言葉を使って遊ぶ姿が見られるようになっていく。そこで、いろいろな活動を「〇〇作戦」と名前を付けて、子ども自身が「楽しかった。また遊びたい」と思えるように保育者も一緒に楽しんでいる。また、食べることに意欲的で『今日の給食紹介』をととても楽しみにしていて、幼児クラスの3色食品群にも興味をもっている。

<本活動のねらい>

・食べることに興味や関心をもつ。

<本活動での教育的意図>

・食材を知り、見ることで、意欲的に食べようとする気持ちを育む。

子どもと保育者の姿 **保**-保育者 **調**-調理員 **子**-子ども  
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

**視点** 子どもに育てたいこと  
 教育的意図をもった働きかけ

○保育者が今日の給食メニュー”味噌ラーメン”の拡大写真を  
見せながら『給食紹介』をする。

**保** 「今日の給食、何か知ってる？  
 （少し間をおいて）味噌ラーメンです」

**子** 「やったー」

**保** 「味噌ラーメンの中には、何が入ってるかな？」

**A 児** 「ちゅるちゅる。」

**保** 「そうだね、ちゅるちゅるの麺が入ってるよね」と言いながら袋麺を見せる。

**保** 「この黄色いのはなーんだ」

**B 児** 「トウモロコシ」

**保** 「うん、そうだね。トウモロコシだよね」と実物のトウモロコシを見せる。

**子** 「トウモロコシ」「(かわ) むいた」「ちょうだい」

**保** 「そうそう！この前、みんなで皮をむいて食べたね。今日は、先生がむくから見ててね」

**子** 保育者が皮をむく様子をじっと見つめる。

**子** 「でてきた」「トウモロコシ」「見せてー」

**体** 食材に興味をもてるように、給食の写真を拡大し、はっきり分かるようにする。

**徳・知** 子どもたちの言葉を受け止めて話すことで、聞いてもらった満足感が得られるようにする。また、子どもの発語を繰り返したり、言い換えたりして物の名前を知らせる。

**知** 言葉と実物を結び付けたり経験したことを言葉に置き換えて知らせたりすることで、話したい気持ちを育む。



保 「ほら、黄色い粒々見えてきたよ。おいしそうだね。今日の味噌ラーメンに入ってるよ」

子 「やったー」

保 「じゃあ、この赤いのはなーんだ？」

子 「ニンジン」

保 「正解。ニンジンも入っているね」

子 「うん」

保 「ニンジンの体操、知ってるよね？みんなで体操しようか。いち、ニンジン、いち、ニンジン（かけ声）」

子 席を立ち、好きな場所に移動して、保育者の動きの真似をしながら笑顔で体を動かす。

健康な心と体、生命尊重等

保 「みんなー、朝ごはんをいっぱい食べてきたから、元氣もりもりだね」

○電話の呼び出し音が鳴る。

保 「あれ、電話がかかってきたよ。誰かな？」

子 「クマさんかな？」

保 電話を取る真似をしながら「もしもし、あっ、給食の先生ですか？えっ！ネギがちょっとしかないんですか？分かりました。」と言って受話器を置く。

保 「クマさんじゃなくて、給食の先生だった。給食の先生が『ネギが少ししかない』って困ってた。みんなどうしよう？どこかにネギ、あったかな？」

子 「あっち」と外を指さす。  
「探しに行こう」「外にある」

保 「そうだ！この前、みんなでプランターにネギを植えたよね。見に行こうか」

子 「うん」「作戦」

保 「そうだね、今日のひみつの作戦は、味噌ラーメンを作ろうにしよう。それでは、出発！！」

子 「しゅっぱーつ」

○所庭に出る。

子 一目散にネギを植えているプランターに駆け寄り「あった！」と笑顔を見せる。  
「こっちにもいっぱいある」

保 「ネギがあったね。大きくなってきてるよ。これは、この前まではこれくらいだったのに、こんなに長くなってるとよ」と身ぶりを交えて伝える。

子 自分からネギを抜こうとする。

保 「先生も抜いてみるよ。あっ、抜けた」

子 「緑だ」「なんか匂いする」

知 色の違いや野菜の名前を知ることができるように、楽しい雰囲気の中で指さししながら知らせる。

体 十分に体を動かすことが楽しめるように、保育者も体を動かしながら広い場所に誘導する。

体 楽しんで体を動かしている姿を認めることで、食べることと体の関係に気付くようにする。



知 経験したことを思い出せるように働きかけ、もっと話したい、伝えたい気持ちを引き出す。

体 菜園活動を通して、食材に興味や関心をもてるようにする。

徳 言葉や身ぶりで伝えることで、ねぎの生長に気付くようにする。

徳 自分からやってみようとする姿を認めたり、見守ったりしながら、興味や関心をもてるようにする。

<p>保 「緑色してるね。」「ほんとだ、ネギの匂いだね。」</p>	
<p>子 「おひげみたい」と根を覗き込む。</p>	
<p>自然との関わり、数量・図形、標識や文字などへの関心・感覚等</p>	
<p>保 「ひげみたいだね。それ、根っこって言うんだよ。ネギはそこからお水飲んでるんだって。みんなもお水飲むよね」</p>	<p>徳・知 子どもの表現に共感しながら、より興味をもてるように言葉を添える。</p>
<p>子 抜いたネギを持って給食室に行こうとする</p>	
<p>保 「給食の先生、待ってるかも。急いで持って行こう」</p>	<p>徳 早く給食室に持って行きたい気持ちを受け止め、言葉に置き換えることで、友達のしていることに気付くようにする。</p>
<p>子 「うん」</p>	
<p>○給食室にネギを持って行き、調理の様子を見る。</p>	
<p>調 「ネギを持ってきてくれたの。ありがとう。助かったわ。今から美味しい味噌ラーメン作るから、楽しみにしててね」</p>	
<p>保 「給食の先生がありがとうだって。みんながネギを持ってきてくれたから嬉しいんだね。今、みんなのネギ洗ってくれてるよ。」</p>	<p>徳 自分がしたことをほめてもらうことで、相手も喜ぶことや自分も気持ちが良いことを感じるようにする。</p>
<p>子 「ぼくが採ったやつだ」とロクに言う。</p>	
<p>保 「包丁でトントントンと切り始めたよ」</p>	<p>体・徳 調理する様子を見たり、自分が抜いたネギを使ったりすることで、早く食べたいと期待がもてるようにする。</p>
<p>子 「ほんとだー」</p>	
<p>○しばらく見た後</p>	
<p>保 「給食の先生が切ったネギを持ってきてくれたよ」</p>	
<p>子 刻んだネギをじっと見たり、匂いを嗅いだりしている。 「ラーメンの匂いする」「お腹空いた」「早く食べたーい」</p>	
<p>健康な心と体等</p>	
<p>保 「そうだね。お腹空いてきたね。手を洗って給食を食べる用意をしようか」</p>	<p>知 同じ食材でも実際に見て、形や匂いの違いに気付くようにする。</p>

【考察】

・2歳児の食育・菜園の取組を考えたとき、自分で植えた食べ物への関心を通じ、食べたいという気持ちを育むことが大切だと考えた。そこで、子どもが簡単に植えることができ、いつ見に行っても育っている野菜がいいと考え、ネギを選んだ。ネギを植えた後は、保育者が水やりをする姿に興味をもち、一緒に水やりを楽しむ姿もあった。『給食紹介』では、特にネギについて紹介し、自分が植えたものに興味や愛着を感じられるような働きかけを意識したことで、ネギだけでなく他の食材についても興味や関心が広がってきている。

(健康な心と体、自然との関わり、生命尊重、数量・図形、標識や文字などへの関心・感覚等)

今後に向けて

・食材を見たり、匂いを嗅いだり、体を動かしたりする活動や、食材の名前を知ったり、異年齢児の食育活動を見たりする活動を通して、「お腹が空いたら食べたい」という感覚や「食べることが楽しんだ」と思える気持ちを育んでいきたい。

やったー!! かぶぬけた

～保育者や友達と一緒に“おおきなかぶごっこ”を楽しむ～

<これまでの経過>

進級児10名 新入児2名 計12名のクラス。女兒が多く普段からいろいろなごっこ遊びを楽しんでおり、ままごと遊びから、遠足ごっこやお店屋さんごっこなど経験したことを再現して遊ぶ姿も見られるようになってきた。また、運動会では、大好きな絵本に出てくるレスキュー隊になり、はしご登りやタイヤ引きで体を鍛えたり、火を消す真似をしたりなど楽しんだ。絵本や紙芝居を見た後、同じ遊びの中で、一人ひとりがイメージしたもの（登場人物や出てくる動物）になりきり、保育者が仲立ちになって、役を決めて遊ぶことも少しずつ増えてきている。

<本活動のねらい>

- ・友達や保育者と簡単なごっこ遊びを楽しむ。
- ・友達のしている遊びの真似をして遊ぶことを楽しむ。

<本活動での教育的意図>

- ・絵本のストーリーから同じようなイメージをもつことで、友達や保育者と一緒に簡単なごっこ遊びを楽しめるようにする。

子どもと保育者の姿 保-保育者 子-子ども  
幼児期の終わりまでに育てほしい姿

視点 子どもに育てたいこと  
 教育的意図をもった働きかけ

○新聞紙を丸めたり、ちぎったりして楽しんだ後

保 「新聞遊び、楽しかったね。みんなで新聞紙を集めてくれる？」

子 「うん。どこに入れたらいいん？」

保 「今日はこの大きな白い袋の中に入れてくれるかな」と言って、白い袋を見せる。

子 集めた新聞紙を袋に入れ始める。 協同性等

保 「みんなが集めてくれたから、あつという間にお片付けできたね。助かったわ。ありがとう」と白い袋をカーテンの後ろに持って行く。

保2 葉っぱの付いたつるを素早く白い袋に付ける。

保 「あれ？こんなところに何かあるよ」と言い、子どもたちにつるを見せる。

子 「ほんとだ・・・何かな・・・」

保 「先生ちょっと引っ張ってみるね！」と重たそうに引っ張ってみせる。「だめだ・・・動かない・・・」

A 児 「なんか『おおきなかぶ』みたい！」

保 「ほんとだね。もう一回引っ張ってみるね・・・」と引っ張り始めると

子 「うんとこしょ！どっこいしょ！うんとこしょ！どっこいしょ！」と数名の子どもたちがかけ声をかけ始める。

保 「やっぱり動かないよ。どうしよう」

A 児 「手伝おうか？」

保 「手伝ってくれるの？助かるわ！先生が葉っぱを引っ張るからAちゃんは先生を引っ張ってくれる？」

徳保育者の気持ちを伝えることで、満足感や自己充実感を味わえるようにする。

知子どもたちが期待をもてるような小さなヒントを知らせることで、次の活動への意欲につなげていく。

徳子どもたちからの言葉を引き出しながら、活動の楽しさを感じられるようにする。

徳期待感を楽しさへとつなげていくことでもっと遊びたい意欲を引き出していく。

A 児 「いいで！」	
保・A 児 「うんとこしょ！どっこいしょ！うんとこしょ！どっこいしょ！」	
子 一緒にかけ声をかけ始める。	
保 「先生とAちゃんだけだったら無理だったね。他の友達にも手伝ってもらおうかな」	徳 次にどうしたらいいのか方法を知らせながら、友達との関わりが広がるようにする。
A 児 「Bくんも、Dくんも、一緒にしよう！」と周りにいる友達に向かって言う。 <span style="float: right;">社会生活との関わり等</span>	
B 児 「いいよ！Aちゃんを引っ張ったらいい？」と言いながらAちゃんの後ろに行く。	
D 児 「先生がおじいさんで、Aちゃんがおばあさんで、Bくんはイヌみたいやな！」 <span style="float: right;">協同性等</span>	
子 「ほんまに『おおきなかぶ』みたいやあ」と笑っている。 <span style="float: right;">豊かな感性と表現、言葉による伝え合い等</span>	
保 「『おおきなかぶ』みたいに引っ張ってみようか」	
保・子 「うんとこしょ！どっこいしょ！うんとこしょ！どっこいしょ！」	知 みんなで同じようなイメージがもてるように仲立ちとなり、子どもたちの言葉や動きを受け止めていく。
保 「抜けないな」	
A 児 「『おおきなかぶ』はネコも出てくるで」	
B 児 「そうだ。イヌがネコを呼んで来てたよな」 <span style="float: right;">思考力の芽生え等</span>	
保 「みんなよく覚えてるね！ということは、ネコが来るんじゃない？」	徳 友達が遊んでいる姿を見て、やってみたいという気持ちももてるように周りの子どもたちにも声をかけ気付けさせる。
D 児 「ニャオー」	
子 ネコの鳴き声の真似をする。	
保 「わあーネコがたくさん来てくれたわ。ありがとう」	
A 児 「ネコいっぱいだ。でも『おおきなかぶ』にはネズミ出てくるよ。ネズミいなかったら、カブ抜けへん」	
保 「そうか。『おおきなかぶ』にはネズミがいたよね。絵本と同じにするの？」	知 子どもの気付きを受け止め、どうしたらいいのか方法を知らせながら子どもが考えようとする気持ちも引き出せるようにしていく。
A 児 「うん」	
保 「でも、みんなが引っ張ってる物、かぶかどうかわからないけど・・・」	徳 子どもの気持ちに寄り添い、友達の思いなど知らせ、相手の気持ちが感じられるようにする。
D 児 保育者とA児のやり取りを聞いた後、「ネズミやるよ」と言う。	
保 「Dちゃん、ネコがやりたいんでしょう？いいの？」	
D 児 「いいよ。ネズミする」	
E 児 「ネズミでいいよ」 <span style="float: right;">協同性、社会生活との関わり等</span>	
保 「Eちゃんもネズミをするの？いいの？」	
E 児 「いいよ。ネズミする！」と微笑む。	
保 「Eちゃん、ありがとう！みんなEちゃんがネズミになってくれるって。よかったね。Aくん、これで絵本と同じになったよ。」	徳 保育者が一緒に遊びを進めることで、遊びが継続し楽しむことができるようにする。
A 児 「うん」	
子 「先生、早く続きしよう」	
保 「そうだね。じゃあ みんなでネコを呼ぼう」	

子 「ネコさーん！！」  
 子 「はあーい」返事をしながら、嬉しそうに出て来る。  
 保・子 ネコがイヌを引っ張って、イヌがおばあさんを引っ張って、おばあさんがおじいさんを引っ張って おじいさんがかぶを引っ張って・・・  
 保・子 「うんとこしょ！どっこいしょ！うんとこしょ！どっこいしょ！」  
 A 児 「まだまだかぶはぬけません、だよ」と笑顔で言う。  
 保 「そうだね」  
 子 「早くネズミ呼ぼう！」「ネズミさーん！！」  
 D 児 「はあーい」と返事をしながら、嬉しそうに出て来る。  
 保 「ネズミ、来てくれたよ！さあ、みんなで一緒に言ってみようかあ」  
 保・子 「うんとこしょ！どっこいしょ！」  
 保 「スッポーン！」  
 Oカーテンの陰から、新聞紙の入った白い袋が出てくる。  
 A 児 「やったー！！かぶがぬけたー」  
 子 「わーぬけた！わーい、わーい！」  
 保 「ネコもイヌもネズミもみんなで一緒に引っ張ったもんね」



知・徳 子どもたちの自発的な行動や考えようとする気持ち、相手を思う気持ちを大切に、みんなが同じイメージをもって遊ぶ楽しさを感じられるようにする。

徳 友達と遊んだ楽しさを感じられるように、一人ひとりの姿や気持ちを認める。

【考察】

- ・「おおきなかぶ」の絵本をイメージできるように葉っぱの付いたつるを用意したことで、子どもたちから「おおきなかぶ」という言葉が出てきて、みんなで同じようなイメージをもち、楽しむことができたと思われる。友達が遊んでいる姿をよく見ていて興味をもち、集まってきたり声をかけて誘ったりする姿は、日頃の遊びの中でも見られている。その中で、普段、自分の思い通りにならないと怒ったりすねたりする姿が見られる子どもが、やりたい役を友達に譲るなど、いつもとは違う姿が見られた。「おおきなかぶのお話にしたい」という思いがあったからこそ、楽しい、もっと遊びたいという気持ちから、友達に譲るといった姿になったと感じる。また、譲ったことで遊びが続けられたということを感じていたように考える。 (思考力の芽生え、協同性、社会生活との関わり等)
- ・絵本に出てくる言葉や知っている言葉を使って、子どもたちなりに伝えよう、表現しようとする姿が見られた。絵本を思い出しながら、「うんとこしょ！どっこいしょ！」のかけ声に合わせて体を動かしている保育者の姿を見て、同じように真似をして体を動かして楽しんでいた。保育者が引っ張る動作を大きくしたり、言葉に節を付けたり工夫することで、遊びが広がり表現の仕方も変わっていったのではないかと感じる。 (豊かな感性と表現、言葉による伝え合い等)

今後に向けて

- ・日々の遊びの中でも、ごっこ遊びの機会を捉え一緒に遊ぶ中で、さらなる子ども同士の関わりや遊びを広げていくことができると思う。また、子どもたちがイメージをもちやすいような環境を整えるなど、引き続き工夫していきたい。表現の仕方も、子どもたちからの動きをどんどん取り入れ、自分たちの思いが伝わる楽しさやみんなで同じイメージをもって遊ぶ楽しさを感じられるようにしていきたい。

『おおきなかぶ』 作：うちだりさこ (福音館書店)

## カエルおってよかったなあ!!

～保育者や友達と言葉のやり取りを楽しむ～

### <これまでの経過>

進級児10名 新入児2名 計12名のクラス。周りをよく見ていて、誰かが楽しそうなことを始めると集まって来る。好奇心も旺盛で、夏のプール活動では3歳児と一緒に入ったり、幼児の集会にも参加したりして刺激を受けている。

また、0・1歳児とは隣のクラスということもあり一緒に体操をするなど、日頃から保育室を歩き来し、お兄ちゃん・お姉ちゃんぶりを発揮している。2歳児保育室の向かい側に事務所もあり、よく声をかけてもらい遊ぶ機会も多い。

体を動かしたり、所庭で活発に遊んだりすることや絵本、絵カード遊びなどが好きで、動物や野菜など一部分が写っていると「これは〇〇!」と答えたり、友達と当て合いつこをしたりして楽しんでいる。色や大きさ・形などにも興味を示し、知らないものが出てくると「これ何?」と聞きに来て、知ろうとする姿も見られるようになってきている。

### <本活動のねらい>

- ・保育者や友達とごっこ遊びをする中で、言葉のやり取りの楽しさを感じる。
- ・色や大きさの違いが分かり、言葉で表現する喜びを感じる。

### <本活動での教育的意図>

- ・思ったことや感じたことを自分なりの言葉で伝えようとし、相手に伝わる喜びを感じられるようにする。
- ・保育者や友達がしていることを真似しながら、イメージを膨らませて遊ぶことの楽しさが感じられるようにする。
- ・色・形・大きさなどの違いが分かるようにする。

子どもと保育者の姿 保-保育者 子-子ども  
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

視点 子どもに育てたいこと  
 教育的意図をもった働きかけ

○絵本「びよーん」を見る。

保 「本の中に何か出てきた?」

子 「バツタ!」「ネコ!」「カエル!」

保 「そうやね。いろいろ出てきたよね」

「みんなもカエルみたいに、ピョーンって跳んでみる?」

子 「カエルはこうやって跳ぶねんで!」

「違うで、こうやで!」など、それぞれがカエルの真似をして楽しんでいる。

保 「そういえば、このお部屋にもカエルいるの知ってる?」

子 「ええー? カエル、ここにおるん?」

「どこやろ・・・」と探し始める。

徳 共通のイメージをもって、遊びが  
 広がり楽しめるような言葉をかけ  
 ていく。

知 子どもの表現を認め、もっと表現  
 したいという次への意欲へとつな  
 げていく。

知 子どもの自発的な行動を大切に  
 し、子ども同士で発見する楽しさ  
 が感じられるようにする。

子 「分かった！これやろ！」と言いながら『かえるさんじゃんぷ』の玩具を持ってくる。

保 「そうそう。よく分かったね」と言いながら蓋を開ける。「あれ？カエルがおれへん！」と空っぽの容器を見せる。

子 「ほんまや・・・カエルおれへん・・・」  
「どこ行ったんやろ・・・」

保 「どこに行ってしまったんやろね・・・」

子 「ピョンピョン跳んで行ったんちがう？」  
「そうや！跳んで行ったんや！」 豊かな感性と表現等

保 「どうする？みんなで探しに行く？」

子 「うん！探しに行く！」「みんなで探しに行こう！」

保 「どこを探す？」

子 「□□ぐみさんに行ってみよう」と言って隣のクラスに行く。

子 「カエル、来てませんか？」

保 2 「カエル？来てないよ！どうしたん？」

子 「〇〇ぐみのカエルがいなくなったの・・・」

保 2 「ええーそうなん？どこ行ったんやろね・・・」

子 「いま、みんなで探してるの！」

保 2 「本当・・・見つかるといいね」

保 「□□ぐみさんにはおれへんかったね」

子 「どこに行ったんやろ・・・」「お外に行ってしまったんかな・・・」

保 「ねえ・・・△△ぐみに行って保3先生に聞いてみる？」

子 「そうやね。保3先生なら知ってるかも・・・」  
「ほんまや！何でも知ってるもんな」  
「聞きに行ってみよう！」と△△ぐみに向かう

子 「保3先生・・・カエル、遊びに来てませんか？」

保 3 「カエル？どんなカエルなの？」

保 「みんなどんなカエルだったか覚えてる？」

子 「え～と・・・赤いカエル！」

保 3 「赤いカエルなの？」 言葉による伝え合い等

子 「黄色いカエルもおったで！」  
「おったおった！それから・・・青いカエルもおったで！」

保 3 「みんなよく覚えてるね。赤いカエルと青いカエルと黄色のカエルやったね」

子 「まだおったで！緑色のカエル！」  
「そうや！緑色のカエルもおったなあ」

保 3 「大きいカエルだった？それとも小さいカエルだった？」と手で大きさを作りながら子どもたちに聞く。

子 「うーん・・・このぐらいかな？」と少し大きめの丸を作る。「え～そんなに大きくないで！このぐらいやで！」と言いながらカエルの大きさぐらいの丸をつくる。

知 思ったことや感じたことを伝えようとする気持ちを受け止めると共に次への活動へとつなげていく。

知・徳 子どもたちからの言葉を引き出し、言葉のやり取りの楽しさを感じられるようにする。

知 子どもの気持ちに寄り添い、次にどうしたらいいのかを考えようとする気持ちを引き出す。

知 知っている色の名前を伝えようとする気持ちを受け止めることで、もっと話したい気持ちを育む。

「そうそう！そのぐらいやったなあ」

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等

保 3 「赤色に青色に黄色に緑色・・・で、この位の大きさ・・・？  
あっ！もしかしてこのカエル？」と言いながらカエルを出す。

子 「ああ～それぞれ！」

保 3 「このカエルだったんだね。朝来たら△△ぐみに遊びに来てたから、どこから来たのかなって思ってたんだ」

子 「カエルおってよかったな！」  
「△△ぐみに遊びに来たかったんやね・・・」

保 「ほんとやね。カエルも遊びに来たかったんやね」

子 「他にもおるかもしれへんで！探してみよ！」と言いながら別の部屋に探しに行く。



知 知っている大きさを伝えようとする気持ちを受け止めながら、ごっこ遊びを展開するきっかけをつくる。

知 子どもたちの言葉を繰り返し、相手に伝わる喜びが感じられるようにする。

知・徳 子どもの言葉を繰り返すことで、カエル（相手）の気持ちになって思いを伝えようとする気持ちを大切にする。

### 【考察】

・保育者の投げかけに対して、自分の思いや感じたことを言葉で伝えようとする姿だけでなく、身ぶり手ぶりを交えて伝えようとする姿が見られた。相手に伝えたいという気持ちが育ってきていることを感じる。日頃から、言葉遊びを楽しめるような絵本や遊びを取り入れていくことで、保育者とだけではなく、子ども同士のやり取りも盛んになってきている。本活動においても、子ども同士の自然なやり取りが見られた。  
(言葉による伝え合い、豊かな感性と表現等)

・遊びの中で色の名前を知らせ、その都度、大きさや形なども意識して知らせるようにしている。普段、何気なく遊んでいる玩具にも色や名前、大きさの違いがあることを知り、相手に言葉で伝えられるようになっていくことに成長を感じる。相手に伝わる喜びもしっかりと感じていたように思う。

(数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、言葉による伝え合い等)

### 今後に向けて

- ・保育者が子どもの発想や考えに共感し関わる中で、子どもたちに、『次はこうしたい』という思いが出てきている。今後は、子どもたちの思いをしっかりと受け止め、タイミングを逃さず次への活動へとつなげていき、遊びを広げていきたい。また、どうしたらいいか、子どもたちだけでは考えられないときは、ヒントを出すなどして、子どもたちが気付いていけるような働きかけをしていきたい。引き続き、子どもからの言葉を引き出し、やり取りへとつなげていけるような活動や、遊びの中で形・色・数等に気付けるような取組を意識して取り入れたい。
- ・カエルの玩具を探る中で、カエルに関心をもてたように思う。本活動をみんなで経験したことを生かし、カエルになって遊んだり飼育したりするなど、カエルにより関心をもてる活動にもつなげたい。